

杉浦日向子著「うつくしく、やさしく、おろかなり一私の惚れた『江戸』」筑摩書房 2006年8月5日刊を読む

江戸の育児と教育

1. (1)江戸時代中期に、江戸の町の人口は百万を超え、当時、世界一のメガロポリスとなった。百万のうち、おおまかに五十万が武士で、五十万が庶民である。居住区の三分の二が武家地で、六分の一が寺社地、残る六分の一の地に、人口の半数にあたる庶民が詰め込まれた。七割がたの庶民は借地で、その大半の三十万人以上が、長屋という共同住宅に暮らしていた。
(2)いわゆる「九尺二間の裏長屋」は、一世帯三坪、四畳半一間押し入れなし。狭小住宅の見本である。もともと単身者用の1 K であり、実際、男の独居が圧倒的に多かった。男女比が二対一の江戸の長屋世帯では、妻帯して子をもうけるのは天与の運だった。
(3)都市部では、少子化が顕著で、夫婦に子一人の核家族。もっとも、長屋では、「親子三人川の字」が、スペースの限界といえる。
2. (1)長屋に子が生まれると、長屋じゅうの人が、その成長を楽しみにして世話を焼くから、職場が外にある母親も育児に煩わされずにすむ。
(2)子は親の所有ではなく、地域社会の財産だから、育児ではなく、次世代の人を育てるのだと考える。たとえば「子は十年の預かり物」という。おなかの中にいるときから十年養って、その後は労働力の一端として世間に出す。
(3)俗に「つ離れ」ともいう。一つから、九つまで、つ、がついて、十で離れる。数え十歳は、子供奉公の目安の歳だから、添い寝をするのも、体を洗うのも、親が手伝うのは、それまでとされた。
3. (1)とはいえ、いつの時代も子にベタベタの親はいるもので、周りに薦められて、泣く泣く奉公には出したものの、心配で、毎日奉公先へ様子を見に行き、逆に子に叱られたなどという話は、日常茶飯にある。
(2)多くの小父さん小母さんに、見守られて育つ、江戸の子どもは、肉親の情とは別の、地縁の人情を、早くから知ることになる。
(3)諸国の吹きだまりだった大都市江戸の繁華は、見知らぬ同士が、縁あって寄り合い、支え合ってこそ、成り立った。二十一世紀に伝えたいのは、この人情。
4. (1)江戸時代は、貧しく哀れで、西洋文化から、はるかに遅れた、未開な社会のように思われがちである。ところが、十八世紀後半の日本には、初等教育を指導する民間機関が多数現れ、日常生活に必要とされる教養を、各自の求めに応じ、教えていた。
(2)おもに西日本では、「寺子屋」と呼び、江戸では、もっぱら「手習指南所」、「手跡指南所」と呼んだ。

5. (1)もとは、寺で檀家^{だんか}の子供衆を集め、僧侶が教えたので、寺子の集う部屋、つまり「寺子屋」が正しい。
- (2)が、江戸は武士の都で、万事、堅苦しく、子を教え導くのに、物を売り買いするのと等しく、「屋」を名乗るのにはふさわしくない、というのでこうなった。
6. (1)江戸の看板通り、「読み書き」が中心だった。
- (2)まずは、平仮名、次に草書。ふだんの書き物は、崩した草書が主だから、これさえ覚えれば、不自由はない。そこで、草書は読めても、楷書は読めないという庶民もいた。
- (3)公の記録文書は、楷書が決まりだったから、武士の子は、たしなみとして、楷書まで、しっかり習わなくてはならなかった。
7. (1)指南所は、月謝の定めのないものも多く、有る者は現金を払い、無い者は、それなりの気持ちとして、師匠に生活用具や食料、または労働力を提供した。
- (2)市井の指南所の普及により、読書人口が増え、出版界、貸本屋が繁盛した。
- (3)江戸の大衆小説は、美しい挿絵がふんだんで、親しみやすく、なにより、すべての漢字に「読み仮名」が振ってあった。
- (4)少しの手習いをすれば、最新作の、胸ときめくラブストーリーも、手に汗握るアドベンチャーも、自分一人で、こっそり読める。
8. (1)就学期間は、十日間だろうが十年だろうが、当人の自由。もっと学びたい子は、見合った教科書を貸し与え、個別指導に入ることもあるし、さらに専門的な「私塾」を紹介することもある。押し付けはない。
- (2)『南総里見八犬伝』のような、世界的な長編ベストセラーを支えたのも、庶民の学力。楽しく学ぶ場が、寝食の間にあったから。
9. (1)巨大都市江戸の、町人地における人口密度は、現在の東京の比ではない。向こう三軒両隣の、ご近所というより、町ぐるみの単位で団子状に、ぎゅっとくっついている感じだ。
- (2)生活距離が極度に近い分だけ、精神面での距離を保つ必然が生まれた。江戸には、ベタベタしたおせっかいのない、ドライな都会暮らしがあった。
- (3)頼まれたら厭と云わぬのが江戸っ子気質。それは、頼まれもしないことには一切干渉しない線引きでもある。家庭内の親きょうだいにも、その線引きはある。子に夢を託すのは、親のエゴで、子には子の人生。頼ってこない限り、親は手を貸さないし、見守るだけで指図はしない。
10. (1)江戸では、どんなに裕福な家でも子どもの個室がないのが当たり前だったから、在宅中は、いつも親の目が届くところにいる。町に出れば、町内の大人の目がある。路上では、行き交う人の数だけ、あいさつをしなければならないのが、江戸の慣習だから、なかなか非行に走る隙^{すき}もない。
- (2)そんな中で、江戸の子どもたちは、少しでも早く一人前になりたいと願うようになるのだろう。どの地方の子どもたちより、おませな言動が目立つらしい。

(3)おむつが取れない、小便臭い、乳臭い、青臭い、おんぶだっこ、ネンネ、尻が青い、クチバシが黄色い、ひよっこ、めそっこ、青二才、若造、十年早い等々、年若をからかう言葉が、大人からではなく、若年層の間で使われている。

11. (1)核家族が多かった江戸では、町内の子ども同士の交流が盛んで、子どもは少し年長の子どもにもまれながら、順繰りに育っていく。子どもを叱るのも、子どもを守るのも、少し年長の子もだった。子どものケンカに口を出すのは、大人の恥だから、目に余る場合を除いては、子どもたちの間で、解決させようとする。

(2)子どもは、未完成な大人ではなく、子どもとしての人格と、子どもとしての社会を、大人から認められていたのだと思う。

(3)かつてはみんな子どもだった。昔も今も、子の成長を眩しく見る大人の瞳は、どれもそうつぶやいているようだ。

P70 ~ 74

<コメント>

杉浦日向子さんの「江戸の教育」。学習塾の原点は「江戸の教育」にあることがよくわかります。

2018年11月18日林明夫記